

## B-3

### 九州方言における主語標示の使い分けと動作主性<sup>1</sup>

坂井美日（日本学術振興会特別研究員／国立国語研究所）

#### 1. はじめに

九州方言には、主語標示形式に *=ga* と *=no* がある（前者 G 系／後者 N 系）。(1)は熊本市方言の例。

- (1) a. Taro=ga war-ta. (太郎が割った。) 【G 系】  
太郎=SBJ 割る-PST
- b-1. sensee=no suwar-inasar-ta (先生がお座りになった) 【N 系】  
先生=SBJ 座る-HON-PST
- b-2. warugaki=no cukoke-ta. (悪ガキが転んだ。) 【N 系】  
悪ガキ=SBJ 転ぶ-過去

本発表は、G 系 N 系の使い分けを、動作主性の観点から捉える（ただし中立叙述環境下（後述））。

#### 2. 先行研究の整理

九州方言の G 系／N 系の使い分けには諸説あるが<sup>2</sup>、従来多く述べられてきた説に、尊敬主語=N 系、非尊敬主語=G 系というものがある（以下「尊卑説」）。例えば、秋山・吉岡(1991)は、熊本方言の主語標示について、「古典語と同様に<sup>3</sup> 『ノ』は尊敬の場合に、『ガ』はやや見下げの場合にと使い分ける。」(p.221)と述べる。上村(1982)は、甕島方言について、「里村・中甕・手打などでは「人」に付くノは敬意を含み、ガがつけば、少し卑める意がある」(p.300-301)と記述する。小林(2002)は、GAJ(方言文法全国地図)をもとに、「ノとガを、尊卑の区別に応じて使い分ける方言がある」(p.111)として、九州や山陰を挙げる。典拠の GAJ 第 2 図「先生[が] (来られた)」と、第 3 図「泥棒[ガ] (入った)」は、それ自体「主格を表す助詞が尊卑によって使い分けられるかどうかを見るため」(p.135)の項目であり、「島根県と九州では第 2 図のほうが <no> および <n> が多くあらわれている」(p.135)との解説がある。

本発表でも、後述するように、主語の待遇は、G 系／N 系に関与的であると考えられる。しかし、九州方言の G 系／N 系を、尊卑だけで説明できないことは、先の(1)b-2「悪ガキ」が N 系であることから明らかである<sup>4</sup>。従来の問題点は、現象の一部（(1)a vs (1)b-1）しか捉えなかったことにある。格標示を観察する際は、文法条件ごとに、名詞句と述部の性質に考慮して網羅的に観察する必要がある（角田 2009 等）。本発表は、網羅的な観察を行なった上で、尊卑現象を含め動作主性で捉える試論を述べる。

#### 3. 本発表の基礎情報

G 系 N 系を持つ方言として、熊本市方言、博多方言、甕島手打方言を観察対象とする。データは筆者の調査に基づく。論を進めるにあたり、中心格（主語と目的語の格）の概要を述べる。中心格は、基本的に無助詞を許容しない。それぞれの有形格標示の概要は、次の通り。

##### 3.1. 対象方言の中心格の概要

【目的語標示】伝統方言形は *=ba*。=*o* も自由交替の関係。

- (2) つぼ {バ/オ} わった。「壺を割った。」

<sup>1</sup> 日本学術振興会特別研究員奨励費 (17J05328/代表：発表者)、若手研究 (B) (16K16851/代表：発表者)、人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」(代表：窪田晴夫氏)の成果を含む。  
<sup>2</sup> 焦点=G、非焦点=N (神部 1992 等) / 文頭=G、非文頭=N (加藤 2005 等) / 他動詞(文頭)主語&意志自動詞主語=G、他動詞(文中)主語&非意志自動詞主語=N (加藤 2005 等) 各説に長短あり。下地・坂井(2015)を参照。  
<sup>3</sup> 古典日本語(特に中古)について、古くは顕昭の『古今集註』(平安末～鎌倉初期)、ロドリゲスの『日本大文典』(近世初期 1604~08)、富士谷成章の『あゆひ抄』(近世中期 1778) 等、尊敬=ノ、非尊敬=ガという言葉及がされている。この見解は、近年の国語学にも引き継がれる(野村剛史(1993)「上代のノとガについて(上)」『国語国文』62-2 等)。  
<sup>4</sup> 実は GAJ 第 3 図(非尊敬主語：泥棒)にも、九州に N 系の報告が複数挙がる。この事実は看過すべきではない。

【主語標示 G 系 N 系】住み分けがある。その詳細は次節。ここでは基礎情報をまとめると、G 系 N 系は、容認のレベルが違う。N 系には、明らかに使えない場合があり、容認度の判断は「拒絶」と「自然（方言文脈ではノ系を使う）」に分かれる。一方 G 系は、主語標示としての使用を拒絶されない（標準語の主語標示=*ga*の影響もあると考えられる）。よって話者の判断は、大きく2通り、「G系しか使えない」、「ノ系が自然（だがG系を拒絶するわけではない）」に分かれる。

判断	例文の表記	表の表記
G系のみ許容。(ノ系の使用を拒絶。)	{ <i>ga</i> / <i>*n(o)</i> <sup>5</sup> }	G
ノ系が自然。(ただし、G系を拒絶するわけではない。)	{ <i>ga</i> / <i>n(o)</i> }	GN

### 3.2. 枠組み

本発表では、G 系と N 系の分布を観察するにあたって、「格配列 (case aliment)」の枠組みを用いる。これは、中心格 (主語と目的語の格) が織りなす体系であり、「有生性階層」(3) と、「他動性の階層」(4) の、2 者を掛け合わせた階層 (以下、便宜的に「クロス階層」) で整理される。

【有生性階層】Silverstein (1976)以来、通言語的に、格の諸現象を観察する上で有効とされる (角田 2009 等)。諸研究の成果を通じ (Dixon 1979、角田 2009 等)、一般に、(3)のようにまとめられる。

(3) 有生性階層…1 人称>>2 人称>>3 人称>>親族・固有>>人間普通>>動物>>無生物

有生性階層と動作主性：階層の捉え方は複数あるが (Dixon1979 等)、Silverstin 自身は、動作主として機能しやすい度合い (左ほど高い) として、この階層を提示している。

【他動性の階層】他動詞主語(A)、目的語(P)、自動詞主語(S)の階層である。自動詞主語は、更に意志自動詞主語 (Sa) と、非意志自動詞主語 (Sp) に分けられる。階層は一般に(4)のように整理される。

(4) 他動性の階層…A>>Sa>>Sp>>P

他動性の階層と動作主性：この階層も、動作主性との関与を想定できる。A,Sa,Sp,P を、動作主性の観点から連続的なものと捉える立場は、古くから近年に至るまで多くある (Hopper & Thompson 1980、下地 2016 等)。動作主の意味特性には、意志性 (自らの意志で行動)、活動性 (出来事の起こし手)、安定性 (非受影性 (下地 2016)。他に影響を与え、自身は影響を受けない) 等、複数挙げられるが、これら意味特性をもとに、動作主性を程度問題と捉えると、最も動作主の典型にあるのは、1. 意志的な活動をし、他に影響を与えて自らは影響を受けない他動詞主語 A、続いて、2. 他に影響を与えないが意志的な活動をする Sa、次に、3. 意思的な活動をせず、他からの影響を受けない Sp、そして、4. 最も動作主の典型から離れるのは、他者から影響を受けるだけの P となる。

本発表では、上記 2 つの階層を掛け合わせたクロス階層を用いる。いずれも、動作主性に換言できることから、高い層の掛け合わせほど、より動作主性が高いと見ることができる。

### 3.3. 観察する構文環境

・基本配列 (4 節)：主節・中立叙述 (非焦点、非主題)・非尊敬主語

・+HON (5 節)：主節・中立叙述 (非焦点、非主題)・尊敬主語

中立叙述の確認として、調査文は「どうしたの？」等の返答の形で、文焦点になるようにした (中立叙述は、情報構造的にみれば文全体が新情報である文焦点に相当する)。代名詞は、それ自体焦点を含むという見方もあることを理解したうえで、ひとまず文焦点下で提示する。

<sup>5</sup> N 系=no は、母音脱落をおこして=n で現れることがある。熊本市方言では、環境を問わず起こる (いわゆる撥音の後も、hon=n (本の) のような n2 拍が可能)。博多方言と、甕島方言では、今回の観察の限り、滅多に母音脱落しない。少なくとも、撥音と母音連続の直後に N 系が付く場合、n にはならない。

#### 4. 基本配列

バリエーションの観察を兼ね、3方言挙げる。程度の差はあれ、1. いずれも階層により格標示パターンが異なり (mixed alignment)、左上ほど G 系、右下ほど N 系である。また、2. 一部「自動詞分裂現象 (split intransitivity)」も見られる。動作主性の観点からみると、動作主=G 系、低動作主=N 系。

##### 4.1. 熊本市方言 (S61・女性<sup>6</sup>)

・左上ほど G 系のみ、右下ほど N 系自然。有生名詞に自動詞分裂現象 (Sa と Sp が異なる振り舞い)。

(5) 親族・固有(Yは妹) (主語が「妹」、人間普通名詞「子供」、動物名詞「犬」でも GN 分布同じ)

A: Y= {ga/\*n(o)} cubo=ba taos-ita (隣接関与無<sup>7</sup>) 「Yが壺を倒した。」

Y=SBJ 壺=ACC 倒す-PST

Sa: Y= {ga/\*n(o)} nobor-ta 「Yが登った。」

Y=SBJ 登る-PST

Sp: Y= {ga/n} taore-ta 「Yが倒れた。」

Y=SBJ 倒れる-PST

(6) 無生物名詞

A: ja= {ga/\*n(o)} domannaka=ba ucinui-ta 「矢が真中を打ち抜いた。」

矢=SBJ ど真ん中=ACC 打ち抜く-PST

Sa: jama=ni kumo= {ga/n} nobor-ta=ne 「山に雲が登ったね。」

山=に 雲=SBJ 登る-PST=SFP

Sp: ki= {ga/n} taore-ta 「木が倒れた。」

木=SBJ 倒れる-PST

熊本市 基本配列	代名詞		名詞			
	1人称	2人称	親族 固有	人間 普通	動物	無生物
A	G	G	G	G	G	G
Sa			GN	GN	GN	GN
Sp						

##### 4.2. 博多方言 (S14 生・男性)

・基本配列：左上ほど G のみ、右下ほど N 自然。一部 (親族・固有人間名詞) に自動詞分裂現象。

(7) 二人称

A: omae= {ga/\*no} orento=ba tabe-ta=roo=ga (隣接関与無) 「君が私のを食べたでしょう。」

2SG=SBJ 私の=ACC 食べる-PST=INF=SFP

Sa: omae= {ga/\*no} iccjar-an=nee 「君が行ってやらないか」

2SG=SBJ 行ってやる-NEG=SFP

Sp: sigotobakkarisijottara, omae= {ga/\*no} taore-ru=bai 「仕事詰めだったら君が倒れるよ。」

仕事ばかりしていたら 2SG=SBJ 倒れる-NPST=SFP

(8) 親族・固有

A: taroo= {ga/\*no} jokacubo=ba war-te simoo-ta (隣接関与無) 「太郎が良い壺を割ってしまった」

太郎=SBJ 良い壺=ACC 割る-て しまう-PST

Sa: taroo= {ga/\*no} deteik-ta 「太郎が出て行った。」

太郎=SBJ 出て行く-PST

Sp: taroo= {ga/no} or-u 「太郎がいる。」

太郎=SBM いる-NPST

(9) 人間普通

A: kodomo= {ga/\*no} gokiburi=ba jaccuke-ta (隣接関与無) 「子供がゴキブリをやっつけた」

子供=SBJ ゴキブリ=ACC やっつける-PST

博多 基本配列	代名詞		名詞			
	1人称	2人称	親族 固有	人間 普通	動物	無生物
A	G	G	G	G	G	G
Sa			GN	GN	GN	GN
Sp						

<sup>6</sup> 本節の熊本市のデータは、坂井(2013)の段階から、例文の精査、再検証、修正を行ない、精度をあげたもの。

<sup>7</sup> 語順が APV でも、PAV でも、AV でも、G/N の判断は同じ。つまりここでは、AV でも N 系不可なので、属格 (「Y の壺(Y が所有する壺)」との混同で N 系が使えないというわけではなく、純粋に動作主性の問題である。以下同じ。

- Sa : cibicjan= {ga/no} nige-te simoo-ta 「小さい子が逃げてしまった。」  
 小さい子=SBJ 逃げる-て しまう-PST  
 Sp : asoko=ni warusoo= {ga/no} or-u 「あそこに悪ガキがいる。」  
 あそこ=DAT 悪ガキ=SBJ いる-NPST

#### 4.3. 甕島手打方言 (S2 生・女性、S36・女性)

- 基本配列：自動詞分裂現象は無いが、左上ほど G のみ、右下ほど N 自然。

##### (10) 二人称(wai)

- A : wai= {ga/\*no} cubo=ba war-ta=joo=ga (隣接関与無) 「お前が壺を割ったでしょう。」  
 2SG=SBJ 壺=ACC 割る-PST=INF=SFP  
 Sa : kokee wai= {ga/\*no} suwar-ta=joo=ga 「ここにお前が座ったでしょう。」  
 ここに 2SG=SBJ 座る-PST=INF=SFP  
 Sp : sigotobakkaisite, wai= {ga/\*no} taoru-r(u)=do 「仕事ばかりして、お前が倒れるよ。」  
 仕事ばかりして 2SG=SBJ 倒れる-NPST=SFP

##### (11) 親族・固有 (M は息子)

- A : M= {ga/\*no} cubo=ba ucuwar-ta=doo 「M が壺を割ったよ。」 (隣接関与無)  
 M=SBJ 壺=ACC うち割る-PST=SFP  
 Sa : M= {ga/\*no} nige-ta=doo 「M が逃げたよ。」  
 M=SBJ 逃げる-PST=SFP  
 Sp : M= {ga/\*no} or-(u)=doo 「M がいるよ。」  
 M=SBJ いる-NPST=SFP

手打 基本配列	代名詞		名詞			
	1人称	2人称	親族 固有	人間 普通	動物	無生物
A	G	G	G	G	G	GN
Sa					GN	
Sp					GN	

##### (12) 動物

- A : neko= {ga/\*no} cubo=ba war-te simoo-ta 「猫が壺を割ってしまった」  
 猫=SBJ 壺=ACC 割る-て しまう-PST  
 Sa : neko= {ga/no} nobor-ta=to=jo 「猫がのぼったんだよ」  
 猫=SBJ 登る-PST=NMNL=SFP  
 Sp : neko= {ga/no} sin-daa  
 猫=SBJ 死ぬ-PST

#### 4.4. 基本配列の観察

- (13) G 系 N 系には階層性が見いだせる。ある点で N 系を使えない層が出てきたら、それより左と上とでは、N 系を使えない。

N 系の限界線は方言毎に異なるが、いずれもクロス階層に沿って、左上ほど G 系のみ、右下ほど N 系となる。これを動作主性 (3.2 節) で見ると、高動作主ほど G 系、低動作主ほど N 系である。ここから G 系=動作主マーカー、N 系=低動作主マーカーと捉えなおせる。従来の尊卑説に一見矛盾した (1)b-2 等は、低動作主であるための N 系標示である。また、熊本市の有生名詞と博多の親族固有名詞には、意志自動詞と非意志自動詞が異なる振舞いをする自動詞分裂現象が見られた。これは、G 系 N 系が単純に自他だけに左右されるというわけではなく、動作主性を反映していることを示す一つの証拠となる。なお、この自動詞分裂現象は、従来、日琉諸語全般において見つからないとされてきたが (佐々木 2006 等)、近年研究が進められる中で (坂井 2013、竹内・松丸 2015、下地 2016) 本発表は、九州方言に当該現象が存在することを示す例の一つとなり、格類型論に対しても重要なデータを提示する。

#### 5. +HON (話者は 4 節に同じ)

- 方言ごとに程度の差はあるが、階層に沿って、N 系を使う範囲が広がるという共通点。

【熊本市方言】各階層の最高位 (最左の代名詞層と最上の A 層) に N 系を使えない領域を残しながら、

基本配列で N 系を使えなかった親族～人間普通名詞の Sa まで、N 系を使うようになる。

(14) 熊本・親族尊敬

A: ziicjan= {ga/\*no} cubo=ba taos-inasar-ta (隣接関与無)「爺ちゃんが壺を倒された。」  
 祖父=SBJ 壺=ACC 倒す-HON-PST  
 Sa: ziicjan= {ga/no} nobor-inasar-ta「爺ちゃんが登られた。」  
 祖父=SBJ 登る-HON-PST  
 Sp: ziicjan= {ga/no} taore-nasar-ta「爺ちゃんが倒れられた。」  
 祖父=SBJ 倒れる-HON-PST

熊本市	代名詞	名詞	
+ HON	2人称	親族 固有	人間 普通
A	G	G	G
Sa		GN	GN
Sp			

【博多方言】最左である代名詞に N 系不可の領域を残しながら、名詞では全層 N 系を使うようになる。

(15) 博多・親族尊敬

A: ziisan={ga/no} jokacubo=ba war-insjar-ta=bai(隣接関与無)「爺さんが良い壺を割りなされた。」  
 祖父=SBJ 良い壺=ACC 割る-HON-PST=SFP  
 Sa: ziisan= {ga/no} deteik-insjar-ta=bai「爺さんが出て行かれた。」  
 祖父=SBJ 出て行く-HON-PST=SFP  
 Sp: ziisan= {ga/no} taore-nsjar-ta=bai「爺さんが倒れられた。」  
 祖父=SBJ 倒れる-HON-PST=SFP

博多	代名詞	名詞	
+ HON	2人称	親族 固有	人間 普通
A	G	GN	GN
Sa			
Sp			

【手打方言】最高位の掛け合わせ 2 人称 A に、N 系不可の領域を残しながら、それ以下は N 系を使う。

(16) 手打・二人称尊敬(omai)

A: omai= {ga/\*no} kokonocubo=ba war-ta=naa (隣接関与無)「あなたがこの壺を割ったね。」  
 2SG=SBJ この壺=ACC 割る-PST=SFP  
 Sa: omai= {ga/no} kokee suwar-ta=naa「あなたがここに座ったね。」  
 2SG=SBJ ここに 座る-PST=SFP  
 Sp: konmamajareba, omai= {ga/no} taoru-ru=do「このままだと、あなたが倒れるよ」

(17) 手打・親族尊敬

A: ziisan= {ga/no} kasi=ba kaw-ar-ta=to=jo (隣接関与無)「爺さんが菓子を食べられたのよ。」  
 祖父=SBJ 菓子=ACC 食べる-HON-PST=NMNL=SFP  
 Sa: ziisan= {ga/no} nige-rar-ta=doo「爺さんが逃げなされたよ。」  
 祖父=SBJ 逃げる-HON-PST=SFP  
 Sp: ziisan= {ga/no} or-ar-ta=doo「爺さんがおられたよ。」  
 祖父=SBJ 居る-HON-PST=SFP

手打	代名詞	名詞	
+ HON	2人称	親族 固有	人間 普通
A	G	GN	GN
Sa	GN		
Sp			

6. 尊卑現象再考

前節に見たように、尊敬主語の場合、たしかに N 系を使う領域が広がる。これが、従来の尊卑説が捉えようとしたところであろう。しかしそれは、従来の非尊敬=G 系、尊敬=N 系という単純なものではない。格配列の枠で体系的に捉えると、その N 系の広がりランダムではなく、一方で、全部 N 系に切り替わるとも限らず、基本配列の分布をベースに、右下から左下に向けて広がる。つまり、動作主性に応じた GN 分布がベースにあり、その上で、尊敬主語になると、基本配列では G 系しか使えなかった領域でも、一部 N 系を使うようになる現象と捉えなおせる。

本発表では、この尊卑現象も、動作主性に基づくものとする。敬意を表現する方法の一つとして、尊敬主語の動作主性を背景化することが考えられる。尊敬表現と動作主性とを関連づける見解・解釈は、日本標準語研究をはじめ多くある。益岡 (2007) は、標準日本語のナル敬語について、意志性 (動作主性の変数の 1 つ) と関連付け、「事態の自然発生を表す「なる」を用いる」(p.65) ことで「動作主の意志性を背景化」(p.65) するものと述べる(「先生がお話になる」[[先生が話す]ナル][[event]HAPPEN])。尾

上(1999)は、標準日本語のラレル構文について、動作を「事態全体の出来という形式」(p.90)で語る「出来文」として位置付け、「その動作的事態が、自然に生起したように語る」ことで「行為の直接性が消えて、高貴な事態として表現する」と解釈する(p.86)。歴史的にも「ラレル(古:ラルル)」の尊敬用法は、自発から生じたという見解が有力である(川村 2004)。

本発表では4節に、N系が低動作主マーカーであることを示した。このN系が、尊敬表現で数段階つきやすくなるというのは、尊敬表現そのもので、主語の動作主性が下げられるためと見るのが穏当であろう。つまり‘尊敬表現だから尊敬マーカーN系を使う’のではなく、‘尊敬表現で動作主性が下がるから低動作主マーカーN系を使える’のである。なお九州方言が、尊敬表現で動作主性を下げる言語かについては、敬語述部に非動作性の要素が含まれるとみられる場合が多々ある事も傍証かもしれない<sup>8</sup>。いずれにせよ、低動作主マーカーと実証されたN系が、+HONで動作主性の階層に沿って広がる事実は重要であり、翻せば、尊敬表現と動作主性を関連付ける先行研究の解釈を補強する点でも貢献しうる。

今後の課題としては、一部方言における、N系の有標化の可能性を観察する必要がある。基本的には上述のように、N系は動作主性が低い限られた範囲で、任意に使用されることから、低動作主マーカー(動作主であると積極的に示すわけではない、機能的には無標に近い主語マーカー)とみるのが穏当と考える。その中で、基本配列と+HONで差が大きい手打のような方言では、尊敬表現の一部で、N系に有標的な側面も見られた。実は、+HON(16)Sa,Spと(17)A,Sa,Spのみ、任意というよりは積極的にN系を使う(G系も文法的だが尊敬表現としてはあまり使わない)という証言があった。前節までに見たように、手打方言にも間違いなく動作主性が効いているが(尊敬表現でも2SGのAではN系を使わない)、コントラストが大きいほど、尊敬マーカーとしての再解釈が進むこともありうるのかもしれない。

課題は多く、N系の限界線の詳細な計算等も残るが、本稿に試みたように、動作主性の観点から九州方言のG系N系を捉えることで、従来の尊卑説では一見矛盾があった分布を、より説明しやすくなる。

#### 【グロス】

HON 尊敬, INF 推量, NEG 否定, NMNL 名詞化, NPST 非過去, PST 過去, SFP 文末詞, SBJ 主語標示

#### 【参考文献】

- 秋山正次・吉岡泰夫(1991)『暮らしに生きる熊本方言』熊本日日新聞社  
尾上(1999)「文法を考える7出来文(3)」日本語学18(1)明治書院  
加藤幸子(2005)「熊本方言における『が』と『の』の使い分けに関して」『言語科学論集』9、東北大学大学院言語科学専攻  
上村孝二(1982)「甕島方言集(1)方言集のための甕島方言概説」『南日本文化』15、鹿児島国際大学付属地域総合研究所  
川村大(2004)「受身・自発・可能・尊敬一動詞ラレル形の世界」尾上圭介編『朝倉日本語講座6』朝倉書店  
神部宏泰(1992)『九州方言の表現的研究』和泉書院  
小林隆(2002)「格助詞」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』国立国語研究所全国方言調査委員会  
坂井美日(2013)「現代熊本市方言の主語標示」『阪大社会言語学ノート』11、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室  
佐々木冠(2006)「格」『シリーズ方言学2方言の文法』岩波書店  
下地理則・坂井美日(2016)「九州琉球におけるガ系とノ系による主語標示」合同シンポジウム「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」発表資料、於国立国語研究所  
下地理則(2016)「南琉球与那国語における自動詞主語の格標示」田窪行則・ホイットマンジョン・平子達也(編)『琉球諸語と古代日本語』くろしお出版。  
竹内史郎・松丸真大(2015)「関西方言の格標示のとりたて性と分裂自動詞性」第151回日本言語学会予稿集  
角田太作(2009)『世界の言語と日本語改訂版言語類型論から見た日本語』くろしお出版  
益岡隆志(2007)『日本語モダリティー探求』くろしお出版  
Dixon, R.M.W. (1979) Ergativity. *Language* Vol.55  
Hopper, Paul J. & Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56  
Silverstein, M. (1976) Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, R. M. W(ed.). *Grammatical categories in Australian languages*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies and New Jersey: Humanities Press.

<sup>8</sup> 例えば熊本などの敬語接辞-inasar(博多方言では音変化で-insjar)は、九州での直接的証拠は見つけにくいですが、古典研究を参照すると、(i)nas+arで、後部要素は上述の「-(r)aruru(ラルル)」の変化とされる(日本国語大辞典第二版)。手打の-(r)arも、自発起源の可能性は今のところ否定できない。他にも、存在詞起源で動作性を表さない要素を敬語に用いる例(熊本:ある、甕島里:やる(あるの音変化))も傍証か。